

## 統計は陽の当たる場所である

鹿島郡統計事務連絡協議会会長 井川 茂 芳  
旭 村 長

私は常に行政にたずさわる者から、陽の当たる職務と、当たらない場所とがあるということ、耳にします。そして、統計行政は日陰の行政であるとなげいていることも知っています。それは統計が、単に数字の羅列で味がなく、上司の人々も統計に関心が薄いということからきているらしいのです。

しかし、どんな仕事にも問題があるし、仕事自体のやり方にも問題がありましよう。それを見い出し解決することによつて仕事への興味もわき、意欲も出てくると私は思うのです。

統計の知識と技術は、近代的な行政運営の基礎となるものだけに、統計行政をこなすためには、統計の理論や技術だけでなく、各種の行政に関し、視野の広い進歩的な理解と判断力が必要となつてくるでしょう。行政が複雑化し、高度化すればするほど「場当たり主義」的な行政ではなく、施策の立て方にも科学的な合理性が十分必要となつてきます。だから、統計を役に立つ時期に役に立つように提供し、利用することによつて、上司の統計に対する関心も高まり、理解も増してくると私は思います。

統計を工夫し、整備し、提供し、理解させ、統計を行政に結びつかせてこそ、統計の権威が高まりましよう。

単に数字を集めるだけでなく、その意味を考えてこそ生きた統計となるでしょう。

私も無言の数字の中から、行政各般について幅広い理解と見識を持ち、物を見る眼、考える頭が、必要だと考えます。

ところで、統計の大半は、国や県の委任事務であります。だから統計はその自治体の行政と離れているという錯覚を起こしやすく、また、そういう事実も見受けられます。

統計が県なり、国の規模で整備されるからといつて、それで市町村行政と関係がなくなるということは思い違いでしょう。いやしくも市町村間のことを集計し、それを市町村行政に役立たせないとすれば、それは統計担当者自身の見識と能力の問題といわなければなりません。そろばんをはじき、計算機を動かすだけが統計の仕事でなく、その自治体の立場で、統計の活用と統計的判断をするのが統計担当者の責務だと思ひます。

ご承知のとおり本県は今、鹿島、筑波、水戸百万都市等の建設の鎗音も高く、この三拠点を軸として後進県から脱却しつつあります。これら開発の基礎は、申すに及ばず正しい統計と綿密な企画から出発したものであつて、今更ながら統計の大切なことを身をもつて知らされています。

最近の市町村行政を見ても統計、企画、財政を合わせた部課（係）で担当していることは、その現われといえるでしょう。

ひらけ行くわが茨城と明るい郷土づくりのため、一そうの統計行政発展と統計担当者各位のご活躍を祈念いたします。